
冬の終わり

一稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の終わり

【コード】

N9534N

【作者名】

一稀

【あらすじ】

とつても短い家族のお話。

冬の終わり。

その日だけ、父さんはかえって来る。どこからかえってくるのかは、知らない。

「久しぶり」

「お帰り」

いつも短い会話が始まる。

でも、これだけで私たちには充分。

父さんが死んだのは五年前。

その次の日から、父さんは毎年決まって冬の最後の日だけあらわれる。

「母さんは、元気かい？」

「うん。相変わらず」

「何か変わった事はあったかい？」

「ああ、そういえばお隣さんが引っ越して来て……」

私は、父さんがいなかった一年分の話をする。一年分の自分の身の回りの話。一年分の母さんの話。

父さんは絶対に母さんの前には現れない。

「母さんにとって僕は、もう過去の人じゃなきゃダメなんだ」

いつか、父さんが寂しそうに言ったのを覚えている。

「夫婦なのにな？」

「……夫婦だから。母さんは僕がいない世界で生きなきゃダメなんだ。それなのに僕がひよいと現れたら、母さん辛いだろ？」

「……わかんない」

母さんはきつと喜ぶんじゃないかと思ったけど、私はそう答えた。きつと、大人の事情ってやつだ。難しい。

私は母さんに父さんの事を話した事はない。父さんが内緒だよって言ったのもあるけど、母さんがきつと寂しそうな顔をすることは

なんとなく想像ができた。

たっぷり話をして、日も暮れる頃、父さんはかえって行く。どこへかえるのかは知らない。ただ、見えなくなる。

「じゃあ、今年はこれくらいにしておこうかな」

「…もういつちゃうんだ」

「また来年来るよ」

父さんにはっこり笑って言った。私の大好きな笑顔だ。

「母さんをよろしくね」

父さんはそう言っつて、消えた。去年も、一昨年も、その前も…父さんは初めて現れた時からそう言っつて消えた。

「任せてね」

私は誰もいない空間にそう言う。来年も楽しい話をたくさん用意してるね。そう付け加えた。

父さんが何より母さんを大切にしていた事は知っている。

冬の終わりの日、それは春の始まりの日。

そして母さんの誕生日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9534n/>

冬の終わり

2010年10月9日10時48分発行